

さくらじま

131号

発行：
公益社団法人 鹿児島県社会福祉士会
会長 久留須 直也
鹿児島市鴨池新町1-7県社会福祉センター内
Tel 099 (213) 4055
Fax 099 (213) 4051

URL:<http://www.minc.ne.jp/~jacsw> E-mail:jacsw@po.minc.ne.jp



会長挨拶

公益社団法人 鹿児島県社会福祉士会
会長 久留須 直也

この度、平成29年5月28日の本会会員総会において、会長に再任いたしました久留須直也です。1期目に定款変更の承認を頂きました通り、理事の任期を最大4期8年と設定したことに伴い、今期が最後となります。

本会が任意団体であった平成15年より理事に就任し、平成19年の社団法人化、平成24年の公益社団法人化を経て、現在まで14年間理事として本会の運営に関わってまいりました。今期を集大成の期と位置付け、会員の皆様と一緒に本会の組織基盤を強化し、さらに発展ができるように会務に精進して参ります。

さて、本会は、平成5年2月に設立しました。その後、先述しました通り、平成19年4月1日に社団法人化し、平成24年4月1日からは公益社団法人に移行しました。公益社団法人化された本会の目的として、「社会福祉の援助を必要とする鹿児島県民（以下「県民」という。）の生活と権利を擁護し、社会福祉に関する知識、技術等に関して、広く県民への普及・啓発を行うとともに、社会福祉事業に携わる職員に対する研修及び相談・助言を行うことにより、福祉サービスの向上と発展を図り、もって県民の社会福祉の向上に寄与する」ということが掲げられています。我々、鹿児島県社会福祉士会は平成27年3月の会員総会において会員の皆様にお示ししました「鹿児島県社会福祉士会の果たすべき役割（ビジョン）」にもあります通り、「県民の生活と権利を擁護（県民福祉の向上）」を実現するために更なる発展を目指しています。

また、2015（平成27）年に策定しました「（公社）鹿児島県社会福祉士会中期計画」に則り、組織基盤を整備し、会員が活動しやすく、着実かつ迅速に会員の活動をサポートできる体制を整備していきます。

さらに、理事体制の見直しを行い、各地区支部・委員会の意見を本会の運営に反映させる仕組みづくりにも取り組み、併せて、新入会員確保のために、準会員制度を活用した社会福祉士養成校との連携も重点事項として取り組んでまいります。

最後に、本会が中期計画に記載した目標を達成するためには、役員・事務局だけではなく、700名近くの会員の皆様の力が必要となります。社会福祉士が鹿児島県における県民の福祉の向上の担い手として活躍できる人材として成長するとともに、組織的な取り組みを行うことができる職能団体として本会が発展していくことにご協力いただきますようお願い申し上げます。

理事就任のご挨拶

向井 康子

会員の皆様、こんにちは。

この度、本会総会にてご信任頂き、理事に就任いたしました向井康子です。

これまで2期4年、理事として副会長として、県社会福祉士会の発展に寄与できればとの思いで務めて参りました。

運営に携わる中で、本会の使命は、公益社団法人として、高い公益性を持って社会福祉に貢献する職能団体でなければならないことを強く感じています。

また、会を安定的に運営していくためには、財政基盤を強固なものとするのが重要であり、そのためには、社会福祉士でなければできない事業を展開していく必要があるということと、有資格者が入会したくなるような魅力ある会にすることが不可欠です。

これらの課題は、会員の皆様の支援なしには、執行部、事務局、地区支部長、各委員長等だけでは解決できません。皆様の力が必要なのです。会員一人ひとりが、会の中で役割を持って会と繋がってほしいと思います。

一方策として、内部理事は各地区支部から代表として選出していただけたらいかがでしょうか。地区代表理事と地区支部長が連携して活動することによって、広く会員の皆様の声を会の運営に反映できる組織にすることが出来ると考えます。

皆さまのお力添えを頂きながら、2年間務めて参ります。どうぞよろしくお願い致します。

田中 顕悟

この度、平成29年5月28日に開催されました公益社団法人鹿児島県社会福祉士会総会にて、初めて会員理事に信任され副会長を拝命いたしました鹿児島国際大学福祉社会学部の田中顕悟と申します。このような重責を担うことになり責任の重さを痛感するとともに、身の引き締まる思いでございます。私事ですが、昨年、基礎研修を受講させていただく機会がありました。講義ならびに演習に参加する中で、倫理綱領の行動規範にある「最良の実践を行う責務」を遵守するためにも、資格取得後の継続した訓練とそのための方の確保ならびに資格取得を目指す方々にもその必要性を啓蒙し、「専門的力量的向上」について真摯に対応をすすめていくことの重要性をあらためて認識いたしました。同時に、鹿児島県の社会福祉の向上のために、社会福祉士会が担う役割が非常に重要であることを実感しております。これまでの会

長・副会長・理事の方々ならび会員の皆様が長年にわたり粉骨砕身され、ここまで築きあげられた社会福祉士会の伝統と功績を受け継ぎ、鹿児島県の社会福祉の向上のために専心努力する所存です。まだまだ力不足のため、皆様に教を請うことや、不慣れな部分も多々ありますが、お力添えを頂戴しながら社会福祉士会の発展のために尽くさせていただきますので、今後も一層のご指導ご鞭撻を賜りたく、何卒よろしくお願い申し上げます。

高津 愛史

平成27、28年の2年間、鹿児島県社会福祉士会の理事を務めさせて頂き、今回2期目を務めることになりました高津愛史と申します。この場をお借りして、会員の皆様にご挨拶申し上げます。これまでの2年間を振り返ると、「せっかくの機会を頂きながら、本会のためになるような行動が出来なかった。」と反省すべき点が思い浮かびます。やはり大切なのは行動力・実行力だと痛感しました。ただ、この2年で、会長、副会長が多忙の中、毎月三役会を行い、会の運営を支えて下さっていること、多忙な業務を調整しながら各地区支部の運営を行っている支部長を始めとする運営委員の皆様、各委員会で県民のため、本会のために活動を行って下さっている各委員会の皆様、多くの業務量を少ない人数でこなしている事務局の皆様、それぞれの皆様の大変さを知ることができた貴重な時間だったと思っています。理事会や委員長地区支部長会議等に出席することで、本会は本当に多くの皆様の努力で成り立っていると学ばせて頂きました。

そこで2期目は少しでも本会の役に立てる様に私なりに3つの目標を立て望む次第です。

1つ目は、本会への入会を促進し、会員を増やしていく仕組みづくりに役立つこと。

2つ目は、本会が会員にメリットを感じさせることができる組織であり続けることに役立つこと。

3つ目は少人数で業務を行う事務局の業務効率化や業務改善に役立つこと。

以上が私なりに考えた3つの目標です。これまでの職務経験を活かして、本会に関わる皆様のためになることを考え、一つでも多くのことを行動に移していきたいと思っています。その結果が、本会の目標である、「県民の社会福祉の向上に寄与すること」につながっていけばと思います。

2年間どうぞよろしくお願い致します。

理事就任のご挨拶

鹿児島地区支部 末吉 晃人

この度、平成29年5月28日の本会会員総会において、理事を拝命しました鹿児島地区支部の末吉晃人です。平成27年、28年度に引き続き、今回2期目をさせていただきます。1期目の2年間を振り返りますと、理事としての思うように行動できず、会長・副会長の三役や、事務局へばかり負担をかけてしまっていました。会運営にどれだけ貢献できているのだろうか、と反省ばかりが残っています。その中でも、理事として地区支部長会議や理事会等に出席させていただいたことで、会運営仕組みや本会の状況を知ることができました。

本会は、約700名を越す会員の方がいらっしゃいます。会員数は毎年確実に増加しており、今後もっと大きな組織になると思われます。研修や会の活動に積極的に参加され、日々研鑽し社会福祉士としての専門性を向上させようと取り組んでいる会員が多くいらっしゃいます。一方で、過去2年間の中では、総会の出席者・委任状の数が過半数に満たず、審議が成立しなかったことや、平成28年度は20名を超える会員が退会されているという現状もあります。このような現状を本会の課題としてしっかりと受け止めて、今後も会員の皆様が本会に何を求めているのか？何を期待しているのか？を考え、期待に応えられる会として発展できるように取り組んでいきたいと思えます。

会員理事は、地区支部・委員会にオブザーバーとして配置されることとなります。今回も引き続き、鹿児島地区支部、霧島・始良地区支部、ホームレスサポート委員会を担当させていただくこととなりました。まずは、会員が一番身近である地区支部における研修等の活動が、今以上に盛り上げていくように、地区支部の運営委員の皆様と協力していきたいと思えます。私自身も積極的に地区支部の活動に参加し、会員の皆様の声を聴くことで、地区支部活動のみならず、本会の運営に反映させていきたいと思えます。

大きなことはできませんが、コツコツとしっかりと取り組んでいき、向上心の高い会員の皆様が満足できる社会福祉士会を作っていくために、力になりたいと思えます。今後も会員の皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

牛山 直美

この度、初めて会員理事に就任いたしました牛山と申します。2年間よろしく願いいたします。

今回、地区支部の先輩方から推薦をいただき理事に立候補いたしました。これまでの学びや経験を本会に還元したいという思いを持っておりましたので、それを実現する機会にできると思い立候補いたしました。

私は平成12年に社会福祉士を取得し、南薩地区支部に所属しております。職歴としては、病院のソーシャルワーカーを約10年、本会事務局臨時職員1年、本会鹿児島県地域生活定着支援センターのソーシャルワーカーを平成28年3月末まで約5年半してまいりました。本会での仕事が約6年半でしたので、会員の皆さんとお会いしたり仕事を一緒にさせていただいた機会も沢山ありました。入会初期の頃から研修会や総会などにも参加してきているほうですので、おそらく皆さんにとっては、身近な理事ではないかと思えます。

私は資格取得後から、職場の先輩や地区支部の先輩方や仲間に、仕事や研修等を通して社会福祉士として必要なことやあるべき姿を教えていただき育てていただきました。社会福祉士としての基本はそこにあります。また本会事務局、地域生活定着支援センター勤務時代は、県内各地の会員さんへの相談や連携をさせていただき、特に地域生活定着支援センター勤務時には罪を犯した高齢者障害者に対するソーシャルワークやネットワーク作りも多岐にわたりおこなってきました。

現在は家庭の事情等もあり福祉の現場からは離れていますが、私はこのように本会との繋がりも深く、本会を通して知識や技術の向上、援助の実践、ネットワーク作りなどしてきた経験があります。私たちの年代は先輩から受け継ぎ、後輩を育てる時期だと考えています。そういったことも踏まえて、経験等を還元できるよう理事としての職務を果たしていきます。

微力ではありますが、会員の声や活動状況を把握し「繋ぐ・支える」ことを意識して、さらに会全体としてより良い活動ができるようサポートしていきます。どうぞよろしく願いいたします。

社会福祉士会 霧島始良地区支部長就任 挨拶

株式会社 遠友舎
管理統括 岡元 健二

社会福祉士を受験10回目で合格した霧島市の岡元です。社会福祉士になって数年の私がこのような大役を任せて頂くことは誠に恐縮なのですが、霧島始良地区の先輩方は個性が強く忙しい方が多いということで、大して個性もない凡人の私が選ばれたと思っております。

私は鹿児島国際大学卒業後、高齢者福祉の世界に入り13年目に入りました。特養、宅老所、デイサービス、有料老人ホームを経験し今の職場で管理統括として働かせて頂いております。高齢者福祉を経験し学ばせて頂いたのは、人としての生きる姿勢です。私の周りのご利用者さんは、年をとっても体が思うように動かなくなっても「人のためにありたい」と積極的に動かれている方が多くおられました。介護とは単に生活のお世話だけをするだけではなく、その方の生き方を支える事だと思っております。

私どもの事業所が加盟している霧島市地域密着型サービス連合会は施設内だけでなく誰でも住みやすい地域作りにも目を向け活動しています。昨年度、「しあわせ物産館」というイベントが初めて開催されました。車いす生活をされている男性との出会いで、高齢者だけではなく誰もが住みやすい地域作りが大事ではないかとのコンセプトで、行政、小学校、商工会議所、第一工業大学の先生や地域住民の方々の協力を頂き開催されました。当日は老若男女、様々な方が来場して下さり、たくさんの笑顔が見られ、これからの地域のあり方を考えさせられる機会となりました。

また、認知症啓発活動の劇団「たけちゃん一座」に8年程前から参加しています。たけちゃん一座は霧島市や始良市内の介護職や市役所職員で構成され、劇を通して認知症の方の思いを代弁し、一般の方に認知症の理解を深めてもらう活動をしています。この活動で学んだ事は「謙虚な姿勢で、目的を持って継続する事」です。介護職をしながら毎週のように公民館回りが続き大変な事もありましたが、「認知症で困っている人のため」、「地域のために」と思いを持ち、先輩方に

助言を頂きながら、人間力を磨き続ける活動を現在も続けています。

誰もが住みやすい地域（共生社会）を築くにあたり、社会福祉士としてできる事は地域に出て人と人との思いを繋げる事だと思います。この事は地域包括ケアにも繋がると思います。今までの経験を活かし、霧島始良の地区支部活動が活発になるよう精進いたします。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

南薩地区支部長就任あいさつ

石原 祐太

今年度より南薩地区支部長をさせていただくことになりました石原祐太と申します。地元南さつま市の障がい者施設で13年間相談業務を主におこなってきましたが、平成28年よりお隣の枕崎市立病院でMSWとして勤務をしています。病院前の工場からは鯉の優しい匂いが流れ、地域の方々は港町ならではの元気と人情味にあふれた良いところでした。

ちなみに、家に帰れば4人の娘に囲まれて過ごす女子力の高いパパでもあります。

さて、当会には社会福祉士の資格を取る前から南薩ユースの活動に参加させていただき、専門的な研修にボランティア活動、夜通しおこなわれる福祉談議（のんかた）に心をたぎらせてきました。そして先輩たちの築き上げたものにもうひとつプラスして、仲間たちとバリアフリーダイビングや大隅への事業所見学等の活動を行ってきました。身体に障がいがありながらも無重力の海に満面の笑顔で浮かぶ利用者さん、夏の暑い日も冬の寒い日も外作業で真っ黒に日焼けした利用者さんやスタッフ、そのような「グツ」とくる場面に出会えるのもこの会の魅力かなと感じています。

気づけば若かった私もユースを卒業する年齢となり、絶妙のタイミングで支部長のお話をいただきました。南薩地区は先輩方から若手まで一体となって取り組める風土があります。自由な発想、熱い思い、つながる絆をこれからも継承するとともに、そのような活動を会員の皆様にもお知らせしていけたらと思っております。力不足とは思いますが、この会がひとりひとりにとって大事なよりどころとなるよう努力してまいります。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

福島旅行記

介護十五

福島県での全国大会に行き、原発事故後6年目の状況を見て来ました。

締切り直前に参加を決め、事前に東京・八重洲の福島県観光交流館で帰還困難地域へのアクセスを聞く。「福島県は面積日本3位と広い。郡山から浜通りの相双地方(相馬市・南相馬市・双葉郡)迄直線で60kmだが山道で今も通行止めが多い。磐越自動車道で県南のいわき市へ行き、そこから常磐道で北上する150kmコースが良い。ただ、帰りはそこを戻るか、福島市経由で倍は掛る。帰宅困難地区は段々小さくなっていて、車で通るだけなら可能だが、区域内で止まることは出来ず、何があるか分からないので高速道路が無難」との事で、多数の通行止めが記載された最新の地図を戴く。アマゾンで放射能測定器を注文するが、なぜか届かなかった。

6月2日午後福島空港から仙台空港へ。確かに海の近くにあり、津波に襲われた痕跡は無くなっていた。空港でレンタカーを借り、常磐自動車道から南下。福島県に入ったのは、放射線掲示板の設置で実感できた。道路区間内0.1~3 $\mu\text{Sv/h}$ (毎時マイクロシーベルト)と表示。以下、単位は省略(自然に年間2.4mSvは浴びているようで、0.1は、年間865mSvに該当)。福島で最大の被害者が出た南相馬市へ入る。18時にサービスエリアに隣接する拠点施設「セデッテかしま」へ到着。地域物産の買い物支援をし、除染作業員の方々と共に食堂で現地のソウルフード「なみえ焼きそば」を食べる。太麺で濃厚ソースが癖になる味。

20時に南相馬市民会館へ到着。立入り解除後1年未満と聞かすが、4日の演奏会を控えた地元高校の吹奏楽部が練習中。そこにあった市広報誌によると、市内各地の空間放射線量率は0.1~0.28。JR駅には中学生が待合室にいる。市役所内はかなり灯りがついていて、人口5万少しの程度には居酒屋やコンビニが、普通に営業していた。2日前に予約したホテルへ向かうが、2階建てでエレベーターは無かった。ズボンプレス等々の常備品もない代わりに洗剤が自動で出るコインランドリーと乾燥機が設置。全国から集まる作業員用に急ごしらえの感じだった。朝食に当然のように大根おろしがご飯の横にあるのと、味噌汁がやたら濃いのが印象深かった。

その日は、浜通りを横切る国道6号線を南下。途中、相馬発祥地の相馬太田神社を参拝。隣接地でゲートボールを楽しむ姿は日常。その近くの住宅地に「除染中」と旗が立った横をマスク等せず老女が歩くのに非日常を感じた。千年以上前の平将門に由来する相馬野馬追は、今年7月ようやく本来の南相馬での開催になるとの事。

4月に規制解除されたばかりの浪江町に入り、仮設交流拠点「まち・なみ・まるしえ」で雑貨購入。浪江駅からJR常磐線は楡葉町迄運休中で、代行バス運行(2021年3月迄に再開目標)。すぐ南の双葉町の帰宅困難地区へ。平成26年9月から6号線は特別通過交通可能(自動二輪・原付・軽車両及び歩行者は立入禁止)と表示しマスク着用の警察官が監視。パトカーの数も多くなる。設置された放射線掲示板は1.046と上昇。「牛との衝突注意スピード落せ」の看板。国道から抜ける道や家の入口はバリゲードで閉鎖。時々通れる脇道は道路通行証のチェックポイントがあり、海側の道路は全て閉鎖。雑草は伸び放題、ポストにはカバー。心なしか舌先が痺れ

る感覚で、車の窓を慌てて閉める。後続車両の運転手はマスク着用。大熊町に入っただけで線量は2.686と更に上昇表示。(この辺りが福島第1原発への最接近地点だった)20km程で富岡町に入って暫くすると帰宅困難地区を出る。後で確認したHPによると地区内の最大線量は6.8だった。

そのすぐ南の、閉鎖されたショッピングモールを活用して半年前に出来た公設民営商業施設「さくらモールとみおか」へ。運動着姿で多数の楽しそうな年配者の集団が居た。何事か聞くと、7年ぶりに富岡町でスポーツフェスタを開催しているとの事。6号線南下中、第2原発への道が開いているのを見てそちらへ向かう。入口の前には、「監視カメラ作動中」の表示。更に行くくと「撮影禁止」と「関係者以外立入禁止」の表示と共に、サイレンが乗った特殊車両が待ち構えていたので、そこでUターンする。原発の見える場所がないかと山道に入って探すが、至る所が工事中。汚染土1トンが入る黒いフレコンバック仮置き場やソーラーパネル設置場、災害公営住宅の建設等が進行中。

6号線に戻り、楡葉町の仮設商業共同店舗「ここなら商店街」に入る。そこに熊本地震の募金箱を見掛け、感動して弁当を購入。店内のレンジで温め、近くにあった太平洋を望める天神岬スポーツ公園で食べる。近くには特老もあり、長期間福島県介護福祉士会が継続的に介護職員の派遣。そこからは残酷な位に美しい海岸が見渡せた。沖合に作られた洋上風力発電も見えた。今年4月に楡葉町小中校が同一校舎で再開。帰宅困難地区内で停電1万8千戸・断水は1万2千戸が継続。復興ツーリズムを被災市町村開催。入れない町は、避難者の体験談。各役場へ確認を。双葉町・大熊町・富岡町役場は、県内他地域に役場機能を避難中。

その後、大会会場の郡山に向かう。ナビで表示された県道35号線から国道288号線を進む。再度帰宅困難地区に入るが、その前後にスクリーニング場の表示を見掛ける。後で聞くと、被爆したかを調べ除染する場所だとの事。途中で雪対策用とおぼしき小豆色の屋根の家が多かった。100km弱の山道で半分以上信号はなく、スムーズに運転出来た。郡山駅前小型車を返すが、240kmをガソリン9ℓで走行。郡山市は30万と福島県最大。発展には大久保利通も、猪苗代湖から水を引く安積疎水に資金融資の貢献。街の中心に郡山総鎮守として安積国造神社があり記念に参拝。音楽の街としても知られ、楽器店や音楽喫茶をよく見掛けた。

大会会場のビッグパレットは最大2万7千人詰めかけた東北最大の避難所。一時、川内村・富岡町仮役場になる。その隣に空き家になった仮設住宅が林立。震災前202万の県人口は、13万人減少。この3年間の出生率は若干増加。今も避難者が県外3万5千人以上。鹿児島にも104人(最大147人)。県内2万3千人以上で仮設に1万6千人在住。大会は1200人が参加し550人は懇親会も。鎌倉会長の25年全ての懇親会に参加中の話の後で盛大に名刺交換が開始。全国規模のユース2次会交流会も行われていた。熊本の会員が20人程壇上で支援のお礼を述べる。翌日の講演で印象深かったのは以下の話~「福島県は震災被害で直接死1604人。間接死2144人と関連死が上回り、今も月10人ペースで増加中。原因はストレス・持病の悪化、そして自殺。その8割は男性。震災は続いている。原発があるのは福島だけではない。震災前日の県外講演会で《今日は、次に起こる大災害の前日かもしれない。》と言ったが、今日も同じ言葉を繰り返します~」。支援希望者は、東京八重洲ブックセンター近くの交流館でお土産購入という方法も。

現地の地図や資料が欲しい方は事務局へお問合せを。

今年九州大会は宮崎、来年全国大会は、山口県。県外会員との交流の機会をお見逃しなく。

福島大会に参加して

小路 慶太
(霧島始良地区支部・始良市役所)

福島県で全国大会が開催されると聞いて、行ってみようかと思いつき、スケジュールなどあれこれ思案していましたが、ようやく出かけられる目途が立ち、出かけることとしました。

夜遅くに高速バスから降り立った、郡山市はそんな時間でも活気がありました。福島県の中央に位置する、県下第2の都市です。福島県は面積は全国3位で、郡山市から沿岸に行くのも時間がかかり、福島県と言っても、様々な地域、事情があるので一口では語れないものがあります。このような郡山市でも、目を凝らすと、仮設住宅であった所や、東京電力の補償取り扱いの窓口などがありました。県下の「福島民報」「福島民友」(福島県の事業で鹿児島の県立図書館でも読めるようになっていました。)という二大新聞にも、震災や原発事故、日々の放射線量の記事が絶えることはありません。

この大会は、「障壁をこえて ～共に歩む社会福祉士」を大会テーマとして開催されました。この障壁を取り除くことと、人々の障壁を乗り越える力を見いだしていく社会福祉士のあるべき姿を大会の趣旨に挙げられていました。

厚生労働省からの行政説明では、社会福祉士の位置づけが「新しく」進められている印象がありました。住民主体の福祉へさらに舵が切られるなか、社会福祉士の在り方が果たすべきソーシャルワークの機能まで突っ込んで、論じられている現状があるようです。社会福祉士への風向きが、変わって来たような感じがしました。

そのような中で、基調講演で社会学者の猪飼周平氏は、ソーシャルワーカーとしての覚悟を説きました。ソーシャルワークを社会の中に張り巡らそうというテーマを示され、現状を見ると様々な思いを抱えることになる講演でしたが、社会福祉士は「ソーシャルワークの先導者になろう」という言葉は重たいものでした。

その後の、シンポジウムや翌日の特別分科会では、福島県下で実践されている方々が、登壇され、あの日からの姿を話してくださいました。平成23年3月11日、その後に突如生じた障壁、その障壁に立ち向かい、その障壁の中で苦しんだ姿が浮かび上がって来ました。当時から今日までの苦しみを思われたのか、演壇で涙ぐまれた発表者もいらっしました。福島県社会福祉士会の方々が「魂の分科会」と表した真剣な分科会でした。ビックパレットふくしまは沿岸部の被災地から内陸の郡山へ避難した数千の方々が身を寄せ、東北最大級の避難所として機能していました。多くの社会福祉士が活動されていて、

当時のこの写真、この壁がそこですとの言葉に思い起こされるようでした。

記念講演は福島県で活躍されているアナウンサーの大和田新氏でした。氏は東日本大震災の事を「東日本・津波・原発事故・大震災」とおっしゃっていました。東日本大震災と言っても、まずどこのどんなできごと?となってしまう伝わらないのでは、2万人以上の死をどう伝えるかとのこだわりとのことでした。命を落とされた方の生きた道のりや家族の悲しみ、2万人以上の死者、その何倍もいる家族らの悲しみを、数字には伝わらない、残らない人々のストーリーを教えてくださいました。講演では泣かないつもりでしたが。

思い出すことに、地元の方が「東京電力福島原発事故」とおっしゃっていたことがあります。決して「福島事故」という言い方ではなく、恥ずかしいことに「障壁」を思う瞬間でした。

2万人の命、その幾倍の人々の悲しみ、福島県200万を筆頭に東日本の苦しみと引き換えに私達は何を考えるのか…。帰りの新幹線で悶々とした気持ちになりました。郡山駅からあつという間に東京駅に到着したので、ああ、こんなに近いのか気持ちになりました。

そんな中ですが、少しは柔らかい話をしたいと思います。懇親会や昼食でいただいた福島の味、日本酒も美味しいものばかり、一生分の日本酒を堪能しました。大和田氏の講演もユーモアも取り混ぜて、笑いころげる場面もあったんです。鹿児島に帰って、山形屋で東北物産展をのぞくと、今年は福島県の喜多方や白河のラーメンが試食販売されていました。ああうまいな、食べてなかったな、あちこち行けてればなあ。福島は広いと思いました。色々考えることばかりですが、何かにつけて関心をもち、自分等に引き寄せて考えることが大事なと思います。

どれもこれも持って帰ってこの欄に載せてもらいたいのですが、この言葉を。福島県社会福祉士会会長が、今年3月11日に発したメッセージの一節に「被災や被害の大きさだけでなく、そこに暮らしている、あるいは暮らしていた一人一人の命と生活、家庭が積み上がって被災の数となっているということです。」「人に認められなくても、評価されなくても県民や目の前にいる利用者に対して『誠実』であることを第一義として在りたいと思っています。」とありました。資料を読み返して、この言葉は持って帰って伝えたい、障壁を越えるのは「誠実」なのかもしれないと思いました。

福島県の皆さま、思いのこもった、大会をありがとうございました。

次回は来年7月に山口県で開催されます。社会福祉士を取り巻く動向を知ることができる、最大の機会だと思います。山口県は福島県よりも近いです。機会を見つけて、ご参加いただければと思います。

社会福祉士として

伊藤 武志

「自分が地域で出来ることは何だろう」そう考えながら仕事に取り組み始めたのは、現在の所属になってからだと感じています。

大学を卒業後、今の法人に入職し、障害者支援に携わるようになってから8年が過ぎようとしています。もともと障害者の方々と触れ合う仕事に就きたいと思っていたので、利用者の方と一緒に作業をする時間はとても楽しく、支援日誌や個別支援計画等の事務的な仕事には苦戦しながらも、充実した日々を送っていました。

しかし、新人の時期が終わり、業務の忙しさや支援の行き詰りという壁に何度もぶつかることがあり、その度に先輩、上司に助けてもらいましたが、自分自身の〈質〉に疑問を感じることも増えてきました。そう感じて何か行動を起こしたというわけではなく、恥ずかしながら、その場しのぎの支援を続けていたように思います。そんな時に出会ったのが、〈就労支援〉でした。3年目に入る直前に、先輩から「ジョブコーチ支援に興味ない?」と聞かれ、その時は先の不安など感じることなく、やってみたいと思い、新しい仕事ができることにわくわくしていたことを覚えています。

そして、3年目からジョブコーチとして活動と、所属も就労移行支援事業所になり、本格的に〈就労支援〉に取り組むことになりました。しかし、そこで待っていたのは、さらなる支援の難しさと一般企業を相手に行う事業主支援と言う新しい壁でした。福祉的な分野の勉強しなかった私にとって、一般企業に対して働き掛ける支援があると知った時には、正直「この仕事は自分に向いていないのではないか」と思いました。そう思いながらの1年間はとても長く、きついものでしたが、この時も上司や同僚に救われ、気付けば〈就労支援〉にやりがいを感じるようになっていました。

4年目には、今の障害者就業・生活支援センターへの異動がありました。ここでの仕事がまた厚みのあるもので、障害者への直接的な支援はほとんどなく、相談を主に就労支援をコーディネートする役割と、それに必要な社会資源やサービスなどに繋ぐ役割を担うという、これまでの仕事とはまた違ったものでした。地域にある障害者福祉サービスはもちろん、公的機関や企業との連携が必須であり、障害者への支援だけではなく、地域との円滑なネットワーク作りもとても重要で、「地域との関わりなしには成立しない仕事だ」と日々痛感しています。事例一つひとつは、とても厚みがあり、複雑・困難なものも多いですが、やりがいを感じているのも確かです。

これまで私は、「自分」⇔「支援対象者」の関係性で支援に取り組んでいました。

しかし、今の仕事でその関係性では支援が成り立たないという事を実感し、職場の上司や同僚、関係機関の方々と意見交換と事例を積み重ねながら支援に取り組むことで、今は「支援対象者」⇔「地域(企業含む)」の関係性の中に、自分がどう関わっていくかと言う視点で、支援を組み立てることが多くなりました。この考え方が全てだとは思っていませんが、少なくとも今の仕事に必要な考え方だと感じています。

今回、遅れての社会福祉士会への入会を決めたのも、今

の私に必要な機会だと感じたからです。同じ職場や職種以外の方々とコミュニケーションを取ることで、新たな情報はもちろん、枠に囚われない視点や考え方を得ることができると思っています。また、新たな繋がりが出来ること自体が、私にとってプラスであり、モチベーションの維持・向上に繋がると感じています。まだ、入会したばかりですが、そんな期待を寄せています。

「自分が地域で出来ることは何だろう」

この疑問に対する数ある答えの中の一つに、社会福祉士会での活動も含まれており、それが私自身のさらなる成長の原動力になることを願い、これからも一人の社会福祉士として精進していきたいと思っています。

南薩ユース交流会に参加して

林 大作

平成29年6月10日(土)、かいもん山麓ふれあい公園にて行われた、南薩ユース交流会に参加しました。

交流会ではまず、堂園会員・森田会員・小屋敷会員より、南薩ユース活動の報告がありました。南薩ユース活動の創成期から現在に至るまでの活動についての報告を受け、南薩ユースが新人会員の不安払拭や会員のバーンアウト防止を目的として結成されたことや、他会員の幅広い活動内容(レクリエーションを通じた障がい者とのふれあい活動や成年後見活動、生活困窮者支援活動等)について知ることが出来ました。

次に「ユースメンバーの仕事紹介(わたしこんな仕事をしています)」と題し、町屋敷会員・神村会員・伊藤会員より、各自のプロフィール紹介や仕事内容の報告がありました。

各会員が悩みや壁にぶつかりながら支援を行っていることや、その壁を乗り越えるため日々努力をしている報告を聞き、同じ社会福祉士として「自分ももっと努力しなければならない」と非常に刺激を受けました。

最後はグループワークを行い、グループメンバーの仕事内容の相互理解を深めたり、自分の理想とする社会福祉士像について話し合いました。グループは様々な分野で働く会員で構成されていたため、障がい者分野、高齢者分野、保健医療分野等、様々な分野の実情や支援内容に関する情報をお互いに得ることができ、社会福祉士としての知識を深める良い機会となりました。会員の中には、社会福祉士が一人しかいない職場で働く方も少なくなく、「自分の支援方法は間違っていないか」「自分の考え方に偏りがいないか」と日々の仕事に不安や疑問を感じながら仕事をしている方も多く存在していることを実感しました。

今回の交流会は、会員同士が「つながる」ことが大きな目的でしたが、他分野で働く社会福祉士同士の相互理解が深まり、南薩地域でのネットワーク形成が今まで以上に進んだように感じました。また、各会員が自分の仕事を他会員に紹介し、それに対し他会員から質問や指摘を受けることが、会員自身の自己覚知を促し、今までより質の高い支援をクライアントに提供することに繋がるのではないかと感じました。

今後も出来る限り交流会や研修会に参加し、自己研鑽に努めるとともに、他会員との連携を図っていききたいと思います。

平成29年度 鹿児島県 相談支援ネットワーク会議総会・研修会報告

特定相談支援事業所 オレンジ学園
相談支援専門員 満枝 政文



平成29年5月21日(日)に鹿児島県相談支援ネットワーク会議総会・研修会がマリンプレスかごしまにて開催され、136名の参加があった。

当会は、平成27年5月に鹿児島県相談支援ネットワーク会議(KGSN)として発足した。相談支援専門員や、難病等も含めた障がい児・者の相談に携わる者で構成する“事業所単位”での組織化を図り、相談支援専門員や相談に携わる者が抱える課題解決のための方策を皆で考え、事業運営の円滑化を目的として研修や日々の業務の連携につとめており、現在115事業所が加入している。

今回の平成29年第1回総会・研修会には厚生労働省社会援護障害福祉部 障害福祉課 地域生活支援推進室 相談支援専門官の大平眞太郎氏と、日本相談支援専門員協会顧問 福岡 寿氏(長野県北信越障害者生活支援センター)をお招きし、『障害者総合支援法の動向とを相談支援体制の展望』を大平専門官に、『ゆるやかな意思決定支援とサービス等利用計画』福岡氏に講演して頂いた。

障害福祉サービス利用に対しては現在サービス等利用計画を作成しなければ、市町村は支給決定を出さないという流れになっている。介護保険に関する方であれば、ケアマネージャーが作成する計画書と同じと考えてもらえば、イメージが付きやすいであろう。

ただ、障害福祉サービス利用の為のサービス等利用計画は平成24年度から動き出したばかりであり、1人の相談支援専門員がかかえる対象者は100名を超えている現状がある。その中で、国としても人材の育成を図り1人あたりに抱える件数を減らし、量より質を重視する様検討がされている。相談支援専

門員の数を増やして、質の向上の為に主任相談支援専門員(仮)配置も検討中であり、年齢が65歳に達したら、介護保険優先となる為ケアマネージャーや介護保険事業所との情報共有・連携が必須となってくるのが現状である。

地域には、障害児者を支える様々な資源が存在し、これまでも各地域の障害福祉計画に基づき整備が進められているところである。しかし、それらの間の有機的な結びつきが必ずしも十分でないことから、今後、障害者の重度化・高齢化や「親亡き後」を見据え、地域が抱える課題に向き合い、地域で障害児者やその家族が安心して生活するため、緊急時にすぐに相談でき、必要に応じて緊急的な対応が図られる体制として、地域生活支援拠点等の積極的な整備を推進していくことが必要である。相談支援専門員は、障害児者の自立の促進と障害者総合支援法の理念である共生社会の実現に向けた支援を実施することが重要であるという再認識が出来た研修であった。

当会は、賛助会員も募集しております。是非入会して一緒に当事者の自己実現達成の為の支援の在り方について一緒に学びませんか?!(^^)!

